

ジェンダーからみた家族

白百合女子大学教授

かしわぎ けいこ
柏木 恵子



最近、家族に関する現象が多くの人々の注目を集め、メディアでも盛んに取り上げられています。少子化、高齢化、離婚の増加、母親の育児不安、父親不在などなど。そしてこれらをめぐる言説は、さらに盛ん、多岐にわたっています。子どもへの過保護、子どもの耐性の未熟、若い層の価値観の変化、母親喪失、家庭の教育機能の低下、家族の崩壊、そして、ならばとばかりに、父性の復権、家庭基盤の充実などです。

このような言説・評価のさまざまは、要は「近年、日本の家庭に起こっていることをどうみるか」のちがいにあります。大別すれば、それは問題だ、なんとか立て直さねばというもの、これに対して、それらは起こるべくして起こったこと、必然の変化とみた上で新たな“家族”の模索・創造過程だとみるもの、の二つになりましょう。(私自身の見解は、一言でいえば“今、家庭はおもしろい”につきます。それは不敬だ、現在の家族の問題を放置するのかと非難されるかもしれませんが、しかし、あえてそう言いたい。社会の激しい変動に最適な家族を日本人がいかに創造するかに強い関心を抱くからです。)

では、この見解のちがいは何によるのでしょうか。結論的にいえば、家族をどの立場からみるか、そこにジェンダーの視点が組み込まれているか否かによっています。

家族の機能はつぎつぎと外部化されるなか、子の養育と家族成員の心身の安定・保護は今も残る家族ならではの機能とされています。この機能を果たす上で“家族は暖かい、愛情に満ちた、支え合う”ことは、必要また望ましいものであることは言を俟ちません。実際、多くの人々が、家族というと暖かい愛情と安らぎの場を想定します。しかし、人々が想定する家族と、現実、さらに家族への感情や期待とは必ずしも一致しません。そこには疎誤がある。またそれは同一家族内でもメンバー間、つまり家族内の立場によって大いに異なります。それはなぜでしょうか？家族は原則として夫婦つまり男女を基本単位として出発し進行します。そして、家族機能の中心である子の養育及びおとなの心身の安定・保護などの役割は、女性（妻、母）が担うのが常態です。男性は職業人として生計を担当し女性は家族役割を担うこの性別分業は、妻・母親の職業の有無にかかわらず確固とした現実として（矢野 1995）また意識として（東京都労働研究所 1998）今もおお強くあります。家族役割とりわけ世話役割は、ジェンダー問題であるゆえんです。

家族役割、世話役割が一方の性によって担われていることは、すなわち男女＝夫婦は世話役割の授受関係にあり、この現実下では夫婦の利害は一致しない、むしろ相反するものとなります。今、日本の女性と男性は、その心理に大きなずれが生じつつあります。結婚や家族についての価値観（NHK 世論調査部 1991）、結婚や配偶者への満足度（柏木ほか 1996 菅原ほか 1997）が夫婦、男女間で大きく異なるのは、こうした家族役割の非対称性の当然な結果です。しかし、このことは長らく閉視されてきました。家族は暖かく愛情と支えにみちたもの、そうあるのが当然とされてきたからです。世話役割を担う主体としての女性へのまなざしが、欠落していました。

それがようやく陽の目を見るようになった。家族役割に内包されているジェンダーに気づき、その視点をもつことが家族研究および家族内の個人——女性、男性の発達研究に新たな地平を開きました。既成のあらゆる事柄の捉え方や言説、学問パラダイムの全てに陰に陽に埋め込まれているジェンダー視点を組み込むことによって、その問題性をあらわにすることが家族研究の課題です。

この間の事情は、心理学における家族研究の最たる形でみることができます。家族と言えば、親子関係それも殆ど母子関係、そして子どもの発達が研究の照準、子どもの発達にとって望ましい母親のしつけや母子関係が究極の関心でした。長らく母親自身の心理やその発達は顧みられなかったのです。最近、家族とそのメンバーである母・妻、女性、父・夫、男性の発達が、ジェンダーの視点を組み込んだ検討が推進されつつあります。（大日向 1998 柏木・高橋 1995）。

もう一つ、ジェンダーの視点とともに重要なのは家族発達の視点です。家族の崩壊、家族の危機といわれるのは、「家族」は時代・社会を超えて一定普遍のものである、あるべきだとの信念あつてのことでしょう。しかし、そうではありません。家族は二つの意味で変化します。一つは、家族のメンバーの成長・発達によって生じる変化、人の個体発達がもたらす家族の変化・発達です。もう一つは、社会の変動によって生じる家族の変化です。前者は、誰もが経験する乳児・子どもと母親の関係、反抗期、青年の自立などで、発達心理学の家族研究はこの変化の過程を専ら扱ってきました。もう一つの家族の変化、すなわち「家族は社会とともに変化する」ことについては、総論的には認めつつも、正面からこの問題に取り組んだ研究はほとんどありませんでした。

人間は有史以来、世界各所でさまざまな家族のかたちを生みだし、子育てを始めとする家族機能をつつがなく果たしてきました（原 1986 LeVine&White 1986）。それぞれの社会の状況や社会の変化に応じて、もっとも適切な家族の形と機能とを編み出してきた、つまり最適戦略としての家族の変化・発達をそこにみることができます。

この家族の変化・発達が、激しい社会変動下にある日本の家族に、今、生じつつあります。この変化は、家族のなかで家族機能の負荷がかかっていた層、世話役割を担ってきた側に、より敏感により早く生じます。社会変動とりわけ高齢化と少産少子化という人口革命的变化をもろに受けたのは女性、そして従来の家族役割の性別分化の問題性、世話役割の非対称性の矛盾に早く気付いたのも女性。今、家族に起こっている諸現象は、社会変動にもかかわらず変化しないでいる家族の在り方の最適性喪失の兆しとみることができます。前述の家族をめぐる意見や感情にみられる男女・夫婦間の垂離、育児の全責任を負った母親における育児不安などは、従来の家族のゆきづまりと変化の兆しを予見させるものです。

このように、家族発達への視点とジェンダーの視点とは密接に関わっています。両視点から家族と個人の発達を検討する作業は、始まったばかり（Cigdem Kagitcibasi, 1996 柏木 1998）。そこには、多くの課題が残されています。家族のなかで母でもなく妻でもなく一人の個人としての心理的世界を求める女性、個人価値の追求・実現と矛盾拮抗しない結婚や夫婦関係、親にとっての子どもの価値・意味、自尊の根、自立や適応の概念などは、人口革命下で生じた発達心理学的問題。家族発達と個人発達双方を統合的に捉え理解する上でホットな検討課題です。これらは単に研究としてのみならず、社会変動のなかでどのような生き方と資質とが幸福な生涯につながるかの間にも応えるものでしょう。

引用文献

Cigdem Kagitcibasi 1996 Family and Human Development Across Culture

—A View from the Other Side—

NHK世論調査部 1991『現代日本人の意識構造（第三版）』 日本放送出版協会

原ひろ子編 1986『家族の文化誌』弘文堂

柏木恵子・高橋恵子編著 1995『発達心理学とフェミニズム』ミネルヴァ書房

柏木恵子編 1998『結婚・家族の心理学——家族の発達・個人の発達——』ミネルヴァ書房

数井みゆき 1998『結婚・夫婦関係の心理学』柏木編（前掲）

大日向雅美 1988『母性の研究』川島書店

Levine, R.A. & White, M.L. 1986 Human Conditions; The Cultural Basis of Educational Developments. Routledge & Kegan Paul

菅原ますみ ほか 1997「夫婦間の愛情関係に関する研究（1）～（3）」『発達心理学会第8回大会発表論文集』57～59

東京都立労働研究所 1998『中壮年女性の家族・仕事・健康に関する意識調査』

矢野真和 1995『生活時間の社会学——社会の時間・個人の時間——』東京大学出版会